

Chiorin!

http://jeso.jp/

第13号 (2014年12月)



日本、金3・銅1

台湾と並んで金メダル数でトップの快挙!



メダルを手に喜ぶ日本選手団 (9月28日、スペイン・マグダレナ宮殿にて)

9月22日から28日の日程で、スペインのサンタンデルにあるマグダレナ宮殿で開催された第8回国際地学オリンピックで、日本は金3、銅1を獲得した。日本が金メダルを複数獲得したのははじめて。また、金メダル数では、台湾に並び参加国・地域の中でトップとなった。

日本選手団で金メダルを獲得したのは宇野慎介(灘高3年)、西山学(巣鴨高

3年)、野村建斗(筑波大附属駒場高3年)の各選手。銅メダルを獲得したのは杉昌樹選手(灘高3年)。野村選手は2012年と2013年の数学オリンピックで銀メダルを獲得しているほか、今年の地理オリンピックにも参加した。日本選手団全員のメダル獲得は初参加以来7年連続。

なお、今回のメダル授与総数は56個で、内訳は金9、銀18、銅29であった。

実力伯仲時代の到来か

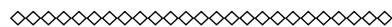
国際地学オリンピックの常勝チームは、韓国と台湾。日本はこの2強に続く地位を占めてきたが、今回はメダル数で韓国を抜き、台湾に並んだ。しかし、試験の得点に着目すると台湾が上位3位を独占、韓国の1人がそれに続き、日本は5、6、9位を占めた。

日本委員会の久田健一郎理事長(筑波

大学)は「台湾と韓国が占めてきた『第1グループ』に、はじめて割り込めたとするのは大きな成果」としたうえで、「国内予選の参加人数が増えて優秀な選手が集まったのと、代表選考後の強化が奏功しているものと思うが、台湾の壁は厚いという印象。韓国も依然強いし、タイやルーマニアなど着々と力をつけている国もある。全般的にメダル競争は熾烈になってきている」と指摘している。

大会規模は横ばい

スペイン大会に参加したのは21の国と地域、選手は82名で、23の国と地域、90名の選手が参加した前回のインド大会よりやや少なくなった。こうした状況について、長年国際地学オリンピックの動向をウオッチしている瀧上豊日本委員会理事(関東学園大学)は、「経済状況によって、コンスタントに選手を派遣できない国があるのが残念。しかし、ノルウェーが初参加、オーストラリアとポルトガルからはオブザーバー参加があるなど、国際地学オリンピックへの関心は依然として高い」と分析している。



各国のメダル獲得数

順位	国・地域	金	銀	銅
1	台湾	3	1	0
2	日本	3	0	1
3	タイ	2	2	0
4	韓国	1	3	0
5	ルーマニア	0	3	1
6	ウクライナ	0	2	2
	インドネシア	0	2	2
	フランス	0	2	2
7	スペイン	0	1	3
	イタリア	0	1	3
8	インド	0	1	2

(※順位は、公式なものでは無く金3点、銀2点、銅1点としたときの本報集計)

上の表は金メダルか銀メダルを1つ以上獲得した国または地域を集計した。その他の参加国は、アメリカ、イスラエル、オーストリア、クウェート、ドイツ、ナイジェリア、ノルウェー、ブラジル、ベラルーシ、ロシアでいずれも銅メダルを1つ以上獲得した。

【今号の誌面】日本代表の感想・ラテンを体感(2面)。国際大会の動向と方向性(3面)。日本大会に向けた準備・リレーエッセイ(4面)。

メダル以上に輝く体験

地学オリンピックを通じて世界と日本を発見した選手達！

初めての国際経験だった

食堂の従業員には全く英語が通じなかったのですが、日本で合宿研修で教わったスペイン語で乗り切ることができました。教わったことを実践できて良かったと思いました。

「オリンピックは参加することに意義がある」という言葉があります。この言葉が示すように、金メダルを獲得したことよりも、国際大会への参加を通じて得られた貴重な経験こそが自分にとって意味のあることだと思います。

これまで私は海外へ出たことがありませんでした。今回初めて海外へ出て国際大会に参加したことで、海外を強く意識するようになりました。将来は、宇宙科学者となって国際舞台で活躍したいと今は考えています。そのために、国際大会で得た経験を今後の勉強の励みにしていきたいと思っています。

宇野慎介
(灘高等学校 3年)

意外と人気な日本に驚き

世界での日本の人気度にすごく驚きました。折り紙をすると喜ぶ人がたくさんいて、鶴などをみんなで折りました。ま

た、京都のおみやげは相当にウケが良く、扇子や万華鏡などはかなり人気でした。あるスペイン人スタッフは大の日本好きで、サムライのお面と刀の模型をあげたときはサムライのまねをして喜んでくれました。自国の名物をおみやげとして持ってきている国は多かったです。

今回の大会を通して世界中の人と友達になることができました。また、英語でないとコミュニケーションが全くとれない環境にあったことで、海外の人と英語で話すことになりました。成績は銅メダルで少し残念ではありましたが、数多くのことを得られた大会でした。

杉 昌樹
(灘高等学校 3年)

来年の参加者へ

来年 IESO に参加する人へのアドバイスですが、是非、日本についてもっとよく知っておいてください。社会的なことでも必要ですが、マンガやアイドルグループ、スポーツ（特に武道）のほか、侍や忍者といったものもかなり人気があります。ちなみに色んな国の話を聞いた感じだと、ジャンプはかなり人気です（ナルトやワンピース、ドラゴンボール etc）。

そしてもう一つアドバイスしたいのは英会話。私は試験前の1か月半程、オンライン英会話教室で練習していましたが、それでも不十分でした。最終選考の試験で英語の試験もありますし、将来役に立つとも思います。無駄にはならないので是非トライしてください。

西山 学
(巢鴨高等学校 3年)

試験会場でたくさんの驚き

驚いたのは、試験会場の机がパイプいすのようなものについているとても小さいものであったことです。A4サイズの問題用紙さえも入りきらないような小さい机で、苦労しました。試験開始の合図がないのにも驚かされました。認められている行為ですが、試験途中で退出する生徒が多かったのも意外でした。

実技試験は主会場が位置する半島で行われ、岩石の鑑定や、露頭の走向と傾斜を測定しましたが、各地点間を走らされ、体力的に負担のかかるものでした。

生徒が宿泊したホテルのすぐ前には、砂浜があり、試験終了後には海に入って遊びました。寒さに強い国の選手は泳ぎましたが、私たちは水分を多く含んだ砂で液状化現象を起こして楽しみました。

野村建斗
(筑波大学附属駒場高等学校 3年)

ラテンのムードを体感

第8回国際地学オリンピックスペイン大会では、準備期間が短かったことや、会期が短縮されたことから、毎回恒例となっていた、全員が参加する初日と最終日のパーティーがなかったが、生徒達には刺激の多い1週間となったようだ。

時間進行は日本と比べるとルーズとも感じられる面も。集合予定時刻が守られないことは何度もあった。一方で食事の時間はしっかり守る、予定行事は遅れていてもすべてこなすなど、妙なところで律儀な「スペイン時間」は、日本選手に

は印象深かったようである。

試験以外のイベントも多数用意された。宿舎の前の砂浜で開かれた Sand Sculpture というイベントでは、各国・地域がチームになって、砂の造形作りに挑んだ。日本選手団は前方後円墳を作成。イタリア選手団が作った「火山」は中で火を焚いて噴煙が出るようになっているなど、各国とも真剣に取り組んだ。

見学旅行では、世界遺産のアルタミラ遺跡近くにある博物館で、有名な洞窟壁画のレプリカを見学。日本選手団も真剣



自らの作品前で記念撮影する日本選手団
なまなざしで解説を見聞きしていた。

同じ日程は三重県代表としてゲスト参加した芝田力君（高田高2年）も一緒に体験。「新しいことの連続で、何もかもが新鮮でした」との感想を述べていた。

今回の視察で見てきた「三重大会」

伊藤 信成 (三重大学)

2016年は三重県で地学オリンピック。「受け入れを決めたけれど、何をやるのか良くわからない」。これが率直なところでした。特に私が専門とする天文学は欧米では地球科学とは別の括りになっている場合がありますので、どんな感じに天文学が扱われているかという点も気になりました。今回のオリンピックでは、出題範囲が決まっていたり、回答が択一式だったり、地学オリンピックの基礎知識が乏しかった私には予想外の点もありましたが、地球を1つの系ととらえ、宇宙からの視点(天文)も加えて様々な角度から自然を切り取るという見方は、地学独特のものであるとも感じましたし、今後もこの特徴を活かしたオリンピックであって欲しいと感じています。

自分の好きな学問を学ぶため、一心不乱に勉強に打ち込む姿。これも1つの青春の姿だと、今回のオリンピックを視察しました。手前味噌の宣伝で恐縮ですが、三重大学のキャッチコピーは「三重から世界へ!」です。三重から「地学の面白さ」、「国際交流の楽しさ」を発信していければと思います。

日本大会の概要について検討を開始しました

久田 健一郎(地学オリンピック日本委員会理事長)

スペイン大会は開催期間が1週間程度で、同程度を予定している日本大会の参考となるものでした。そこで、今回参加した日本の役員と大会最終日に、最寄り空港や宿舎からの移動を再確認するとともに、試験形式の変更による日程への影響を議論しました。

今大会では国際協力野外調査(ITFI)は、試験前に実施されました。しかし、生徒の負担を考え、ITFIの活動はこれまで通り試験終了後からとすることにしました。

試験は5つのうち4つが筆記です。そのうち3つのテーマは、主として地質・固体地球科学、気象・海洋科学、天文・地球惑星科学に相当するものとし、残りの1つは環境問題などの総合問題という位置づけにするなどの工夫が必要だと感じました。

今後は、大会日程の概要をかためて、日本大会の周知徹底や協力の呼びかけを強化することが喫緊の課題と考えています。また、IESOに選手として参加する生徒だけでなく、地元の高中生や大学生にとっても、絶好の国際交流の機会です。試験以外の活動でいかに彼らを主体とするかが課題だと感じました。

Chiorin! リレーエッセイ no. 13

気象一生!

奥村 政佳



気象に出会ったのは、小学校1年生のころ。学校の自由研究などで自然と気象に関するものを取り上げました。高校3年生のとき、当時最年少の17歳で気象予報士に。大学では気象学を専攻するも、アカペラにハマり、結局は歌手の道に進みました。

オリコン1位になったり、紅白歌合戦に出たり、日本武道館でのワンマンライブなど、エキサイティングな日々の合間を縫って、興味があった教育分野、その中でも大学時代にアルバイトで関わった保育士の勉強を始めました。今は保育園の先生をしながら、全国でライブもしつつ、気象予報士・防災士として講演やメディア出演。2005年からは災害ボランティアとしても各地の現場での活動をしています。

しかし、どの分野に行っても気象を勉強していて良かったと心から思います。なぜなら、生活に密着した分野だから。

曇り空の屋外イベントでは、レーダーの画面とにらめっこしながら、スタッフに指示を出します。ライブでは、MCでお天気の話をしつめます。保育園でも、毎日、空や雲の質問がたくさん飛んできます。自分で出した1時間単位の予報で計画を立てることもできます。被災地での活動中も、細かい予報が重宝されました。気象は、どんな人生でも、一生使えるスキルです。

最後にひとつ。地学分野が高校教育で不人気だと、先生からも生徒からも聞くことが多いです。この際、「地学」という名前を「地球科学」に変えれば良いと思うのです。たかがネーミングと思われ

るかもしれませんが、イメージは大事です。僕のいる世界も一緒ですから(笑)。

「物理・化学・生物・地球科学」、うん、なんかとっても好感度がアップすると思うのだけれど…どうですか?みなさん。先生方も、ご一考を^^

おくむらまさよし。アカペラグループ「RAG FAIR」のメンバーで「ボイパ」やアカペラブームのパイオニア。気象予報士・防災士・保育士・科学技術コミュニケーターとしても活躍。地学オリンピック日本委員会主催の自由研究コンテストの最終審査員も務める。日々の活動はfacebookにて。

NPO 法人地学オリンピック日本委員会
ニュースレター Chiorin! (no. 13)
平成 26 年 12 月 5 日発行
発行人: NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会
編集長: 萬年一剛 (広報副主査・神奈川県温泉地学研)
〒113-0032
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 3F
印刷所: あしがら印刷